



【開館時間】9:00～16:30

【休館日】毎週月曜日(8/10、9/21、11/23は開館)、8/11、9/23、11/4

【観覧料】一般420円/高校生・大学生260円/小学生・中学生100円/未就学児無料(団体割引は30名以上でご利用いただけます)※静岡市内在住または静岡市内の小・中学校に在学中の小・中学生は無料※静岡市内在住70歳以上の方、障がい者手帳等の交付を受けている方とその介助者1名は無料

【交通】<バス>静岡駅南口22番バスのりばから「登呂遺跡」行き乗車、約12分終点下車 <タクシー>静岡駅南口から登呂公園へ約10分 <東名高速>静岡I.C.より約10分、日本平久能山スマートI.C.より約5分 <駐車場>登呂公園南側に有料駐車場があります(普通車400円/1日)



「芹沢銈介の家」は、もともと宮城県登米市石越町にあった農家の板倉です。芹沢はこの板倉に惹かれ、1957年に東京都蒲田の自邸内に移築しました。その際、随所に芹沢らしい小粋な工夫を施し、新しい命を与えたのです。芹沢はこの建物について、「ぼくの家は農夫のように平凡で、農夫のように健康です」と語っています。

芹沢の没後(1987年)、この建物は当館の附属施設として、現在の地に移築されました。

「芹沢銈介の家」へ！

回覧・祝日は、  
 8月11日(祝) 通常は日祝  
 8月12日(土) 通常は日祝  
 8月13日(日) 通常は日祝

【時間】美術館と同じ【観覧料】無料

●会期中、さまざまなイベントを開催する予定です。詳しくはホームページ(www.seribi.jp)をご覧ください。お電話(054-282-5522)にてお問い合わせください。

静岡市立芹沢銈介美術館  
 静岡市駿河区登呂五丁目10-5 TEL 054-282-5522 www.seribi.jp

生誕125年記念展

# 芹沢銈介

模様をめぐる88年の旅

2020年7月21日(火)⇒11月23日(月)

静岡市立芹沢銈介美術館  
 静岡市駿河区登呂五丁目10-5 TEL 054-282-5522 www.seribi.jp



# 模様をめぐる 88年の旅 芥沢銑介 年譜



1895 5月13日、静岡市葵区本通一丁目に生まれる。



1913 静岡県立静岡中学校（現・静岡県立静岡高等学校）卒業。  
東京高等工業学校（現・東京工業大学）工業図案科入学。



1917 芥沢たよと結婚。芥沢姓となる。日々写生に打ち込む。



1927 友人の鈴木篤と共に朝鮮半島を旅する。往路、船中で雑誌「大調和」に掲載された柳宗悦の論文「工藝の道」に感銘を受け、生涯の転機となる。



1928 上野公園の大礼記念国産振興博覧会会場に柳らが建設した「民藝館」にて沖縄の紅型の風呂敷（うちくい）に出会う。



1929 第4回国画会展にろうけつ染による「紺地蔬菜文壁掛」を初出品、国画奨学賞を受賞する。



1934 東京市蒲田區蒲田町（現・東京都大田區西蒲田）に移住する。



1939 初の沖縄旅行をし、紅型の技法を習得すると共に精力的に沖縄各地を見学する。



1945 空襲により家屋、工房、家財を失う。「型染カレンダー」の制作を始める。

1946 染色グループ「萌木会」を創設する。

1955 有限会社「芥沢染紙研究所」を設立する。

1956 「型絵染」で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。

1957 鎌倉市津の農家の離れを借りて、一人暮らしを始める。宮城県石越町の板倉を蒲田に移築する。

1966 西アジアおよびヨーロッパを旅行する（48日間）。

1976 文化功労者となる。  
フランス政府からの招聘により、パリ国立グラン・パレにて「Serizawa」展が開催される（フランス国立美術館連合、国際交流基金主催）。

1981 フランス芸術文化勲章（オフィシエ）を授与される。  
静岡市立芥沢銑介美術館が開館する。

1984 4月5日、心不全のため逝去する。享年88歳。

1989 東北福祉大学芥沢銑介美術工芸館が開館する。

2001 スコットランド国立博物館（イギリス・エディンバラ）にて「芥沢銑介」展が開催される。（東北福祉大学芥沢銑介美術工芸館との共催）

2005 朝日新聞社と開催各館の主催で生誕110年記念「芥沢銑介展」が開催される。（朝日新聞社、開催各館主催/全国6箇所を巡回）

2006 ロシア国立エルミタージュ美術館にて「日本の色彩 芥沢銑介の世界」展が開催される（静岡市との共催）。

2015 生誕120年記念「デザイナー芥沢銑介の世界展」が開催される。（東北福祉大学芥沢銑介美術工芸館、朝日新聞社主催/全国5箇所を巡回）

2020 生誕125年記念展「芥沢銑介 - 模様をめぐる88年の旅 -」が開催される。

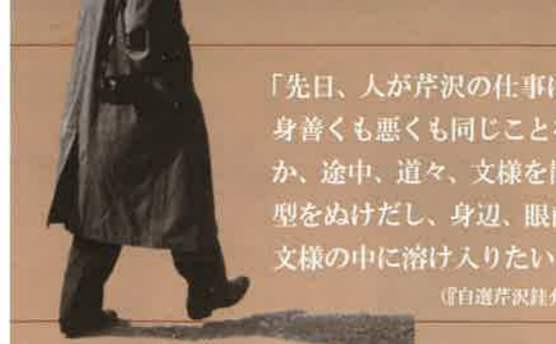


色染をする芥沢銑介（一九八〇）

芥沢銑介がもっとも大切にしていた言葉は、「模様」かもしれません。もともと画家を目指していた芥沢は、20代にはデザイナーとして活躍し、32歳の時に柳宗悦に出会い、染色作家としてデビューします。柳は、「模様の深さは想へば秘義の秘義である。時代の力が蔭に加はるならいざ知らず、個人でその美しさに迫ることは容易な業ではない。何か特別の恵みがなくば近づけるものではない。」と書いた上で、「何の幸福か吾々は今芥沢を有っている。芥沢に働いてもらうことで、今の時代はどんなに美しさを増すことか。」と記しています。芥沢の類まれな模様の才能を見出した柳。柳が指し示した模様の道を、模様を集め、模様を散らしながら、型染という技法で一筋に歩いて行ったのが芥沢だったといえます。

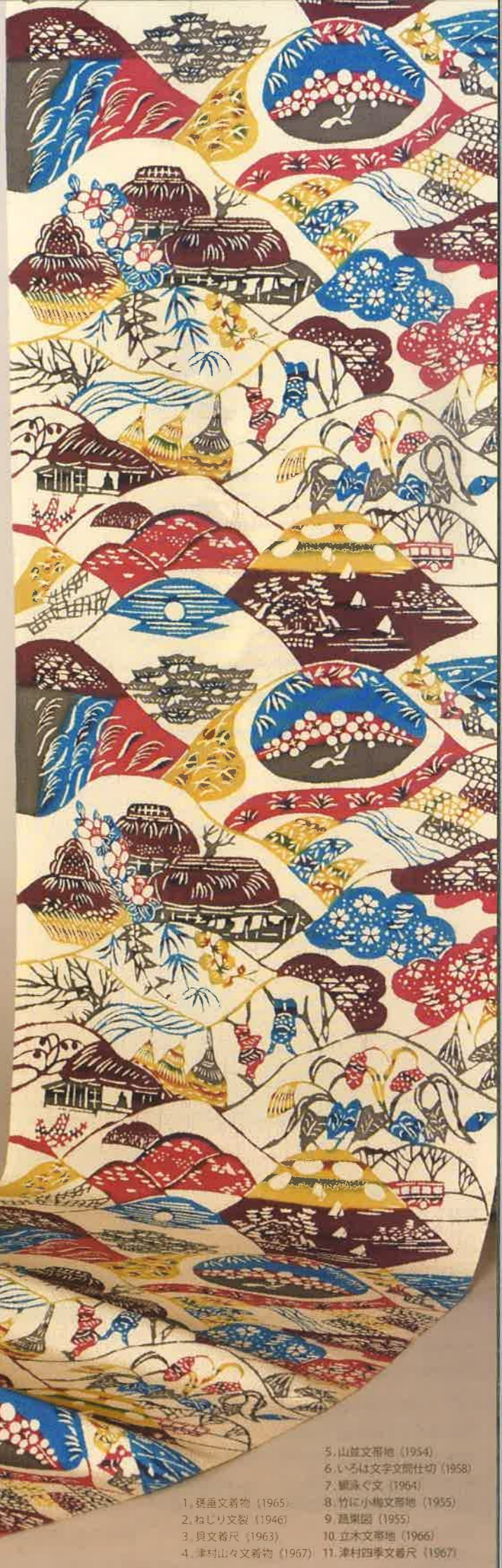
本展覧会は、型染を主軸に「模様」に真摯に向き合いながら仕事をつづけた芥沢の生涯を、初期から晩年まで200点の代表作を通じて綴ります。

## 歩いてゆく。模様を集め、模様を散らしながら。



「先日、人が芥沢の仕事は染色ではないと云ったというのを聞きましたが、正に、私自身善くも悪くも同じことを自分に言ってきました。何処を歩いているか、何処へ行くのか、途中、道々、文様を散らし、文様を拾い、眺め愉しんで来た私は、この頃になって、型をぬけだし、身辺、眼前に、街に、野に、この世界に現はれる文様の中に溶け入りたいものと頻りに念っております。」

『自選芥沢銑介作品集下』あとがき/1988



- 1. 蓑虫文着尺（1965）
- 2. ねじり文裂（1946）
- 3. 貝文着尺（1963）
- 4. 津村山々文着尺（1967）
- 5. 山並文帯地（1954）
- 6. いろは文字文間仕切（1958）
- 7. 鶴と文（1964）
- 8. 竹に小梅文帯地（1955）
- 9. 蕨葉図（1955）
- 10. 立木文帯地（1966）
- 11. 津村四季文着尺（1967）